

2020年11月13日

<大賞>

調査報道「呼吸器事件」～連載・西山美香さんの手紙～新聞報道
書籍「無実の訴え 12年・私は殺ろしていません」

中日新聞 呼吸器事件取材班（代表・秦 融 編集委員）

24歳の看護助手が患者殺害の罪で逮捕され、13年間、無実を訴え続けた。多くの記者が分担して、西山美香さんから両親への350通の手紙を丹念に読み、裁判記録や中学時代の恩師などの周辺をくまなく取材し、捜査の立証の矛盾を突き止めていく。

再審無罪への道のりで重要な役目を果たしたのが、記者の依頼で精神科医師が実施した獄中鑑定だった。この医師は、中日新聞記者として7年間勤務した後、医学部に入り直して医師の道を行っていた。ジャーナリストの視点を持つ医師の存在は大きかった。軽度知的障害・発達障害・愛着障害を明らかにし、「供述弱者」を虚偽自白に誘導した冤罪を、精神医学の視点で検証。

7回の裁判で有罪認定された困難な状況で、2020年3月に再審無罪になった。

医学とジャーナリズムの協力によって無実の救済につなげた社会的なインパクトは大きく、冤罪を解く新たな手法として、医学ジャーナリズムに新境地を開いた。



<大賞>

『「脳コワさん」支援ガイド』（医学書院）

鈴木大介さん（文筆家）

「脳コワさん」とは、「脳がこわれた人」の略で、発達障害当事者である夫人の造語だという。脳受傷後の高次脳機能障害、発達障害、認知症、うつ病、どの人も、なぜか「会話がうまくできない」「雑踏が歩けない」「突然キれる」「すぐに疲れる」……。病名ではなく、困り事で括り、当事者と援助職が協力するという視点で問題解決への道筋を提案しており、脳科学者やリハビリテーション専門医もオリジナリティを高く評価している。援助職に不足していること、当事者を不安に陥れ苦しめていることを率直に指摘しつつ、当事者が楽に生きていけるように、援助者が空回りしないで支えていけるように力を与えてくれる。

社会派ライターだった著者が、闘病記『脳が壊れた』や続編『脳は回復する 高次脳機能障害からの脱出』を読んだ当事者と交流するうち、「私たちの苦しさを伝えてください」と背中を押されて、援助職と当事者の相互理解を得るために執筆したのがこの作品だ。

豊富なイラストレーション、重要な部分に黄色マーカーを引いていることも当事者が読みやすい工夫になっている。



<優秀賞>

ザ・ドキュメント 裁かれる正義 検証 揺さぶられっ子症候群

関西テレビ放送 報道局 SBS取材班

「生後2カ月の孫を揺さぶって死亡させた」という疑いで逮捕され、大阪地裁一審判決で有罪とされた祖母が、高裁二審判決で逆転無罪判決を得るまでのドキュメンタリー。前作「ふたつの正義 検証・揺さぶられっ子症候群」は2018年に発表され、夕方のニュース情報番組「報道ランナー」枠でも検証特集を継続的に発信した。

揺さぶりの工学実験や海外の医学論争を踏まえ、検察側と弁護側の医師、海外の医師に科学的な根拠を丁寧に取材している。医学的な判断基準を、いったん作るとなかなか変えられない日本の医療が抱えている問題、医学鑑定の在り方と限界についても考えさせられる。

取材と番組づくりの中心になった報道局報道センター 記者の上田大輔さんは、弁護士資格をもつ。一連の報道は、「冤罪をなくす」「虐待をなくす」という、衝突する二つの正義を考える上でも貴重な問題提起となっている。



<満美子賞>

ウェブサイト「健康と病いの語り」データベース

書籍『患者の語りと医療者教育—“映像と言葉”が伝える当事者の経験』

認定NPO 法人健康と病いの語りディパックス・ジャパン

エビデンスベーストメディスン (EBM) とともに、個々の患者の語り (ナラティブ) を体系的に収集・分析するNBIMの重要性がクローズアップされている。それを、Webの形で誰もが利用できるように活動しているのがこのNPO。「乳がんの語り」「前立腺がんの語り」「認知症の語り」「大腸がん検診の語り」「臨床試験の語り」「慢性的痛みの語り」「クローン病の語り」という7つのデータベースが公開され、300人を超える患者や家族の語りが、映像・音声・テキストの形で収録されている。そこには、病名を最初に知った時に何を考えたか、治療法の選択で信頼できた情報は何かなど、「当事者にしか語れない言葉」がある。たとえば、20代で乳癌と診断され、うろたえた女性が <http://www.dipex-j.org/> をクリックして 乳



癌⇒20代を選ぶと、映像ともにこんな声が流れてくる。「先生が、わたしの目を見てくれなくて、で、『結果どうだったんでしょうか』って聞いたら、母のほうを見て、『あの、残念ですが、悪いものでした』と(略)」。さらに読み進むと、わが子の反応や45歳になったいまも、元気に患者会の運営にあたっていることがわかる。2019年12月には、教育的活用の実例を集めた書籍『患者の語りと医療者教育—“映像と言葉”が伝える当事者の経験』を日本看護協会出版会から刊行。医療者教育にも不可欠な存在になった。